

## プラネタリウム投影プログラム「アジアの星と神話」制作報告

嘉 数 次 人 \*

### 概 要

2010年12月から2011年2月の期間に投影するプラネタリウムの投影プログラムとして「アジアの星と神話」を制作した。アジア地域に伝わる、星や天体にまつわる神話や伝説を集めて紹介した内容であったが、伝説の紹介にあたっては、宝塚大学とコラボレーションを行ない、美術専攻の学生が描いたイラストを投影した。本稿では、コラボレーションの経緯や、投影プログラムの内容等について報告する。

#### 1. はじめに

2010年12月から2011年2月の期間において投影したプラネタリウム「アジアの星と神話」は、通常のプラネタリウムではほとんど紹介される機会のない、アジア地域に伝わる星の伝説や星座を紹介することに主眼を置いて作成した。

一方、2009年に世界中で展開された世界天文年の事業一環として、アジア地域に伝わる星の神話や伝説を集めて出版しようというアジア共同企画「アジアの星・宇宙の神話伝説」プロジェクトが行なわれ、現在も作業が進行中である。今回のプラネタリウムでは、このプロジェクトの成果の一部の提供も受けて、アジアの星伝説を紹介した。

以下において、番組制作にあたってのコンセプトと、制作した内容について報告する。

#### 2. 番組コンセプト

今回の番組においては、以下の点を伝えることに主眼を置いた。

①現行の88星座は、西洋で完成されたものであるため、関連して紹介される神話や伝説も、ギリシア神話など西洋のものである。しかし、アジア地域にも、星に関する神話や伝説が古くから作られ、現在に至るまで伝えられているので、それらの紹介を通じて、アジアの人々の自然観や文化について考えてもらえる場とした。

②現行の星座が日本で使われるようになったのは明治以降であり、それ以前は中国星座が使われていた。そ

こで、長年日本人に使われていた星座は、どのようなものかを伝える場とした。

③星にまつわる神話や伝説は、それぞれの地域に固有のものもあるが、同じ内容を持つ伝説がアジア各地に点在している例がある。これらはお互いの人・物の交流から生じたものである。そこで、それらの共通点などを紹介することにより、アジアに共通する自然観を考える場とした。

#### 3. 本番組で取り上げたテーマ

本番組で紹介したテーマは、以下のとおりである。

①中国の星座：古代から江戸時代末までの日本で使われていた星座は、中国の星座体系であった。そこで、中国星座の歴史やコンセプト、中国星座でつないだ星空の紹介を紹介した。

②アジア地域に伝わる星の神話・伝説：以下の6テーマを紹介した。

- ・ベトナムの七夕伝説
- ・韓国の日食伝説
- ・むりかぶし伝説
- ・インドの日食伝説
- ・インドの天の川伝説
- ・インドネシアの天の川伝説
- ・インドネシアの南十字伝説

#### 3. イラストの制作について

本番組では、さまざまな観覧者に親しんでいただけるように、神話・伝説のストーリーに沿ったイラストを用いることにした。その制作にあたっては、兵庫県の宝塚大学との連携事業として、造形芸術学部の大河繁教

\*大阪市立科学館

授の協力のもと、同大学で芸術を専攻する学生に描いていただいた。

それぞれの神話・伝説とイラスト制作者は、以下の通りである。

- ①タイトル絵&七夕伝説:宮崎ひかり
- ②韓国の日食伝説:中村和斗
- ③むりかぶし伝説:高山 茜
- ④インドの日食伝説:川崎宏恵
- ⑤インドの天の川伝説:玉井満里子
- ⑥インドネシアの天の川伝説:山崎 歩
- ⑦インドネシアの南十字伝説:岩橋 藍

それぞれの制作者には、筆者から番組や神話・伝説のコンセプトを説明し、さらに実際の制作段階ではプラネタリウムで投影した際に見栄えのする構図や色調、さらには雰囲気合ったタッチや作風などをこまめに打ち合わせた。また、制作途中の絵を、プラネタリウムドームで投影してチェックも行なった。

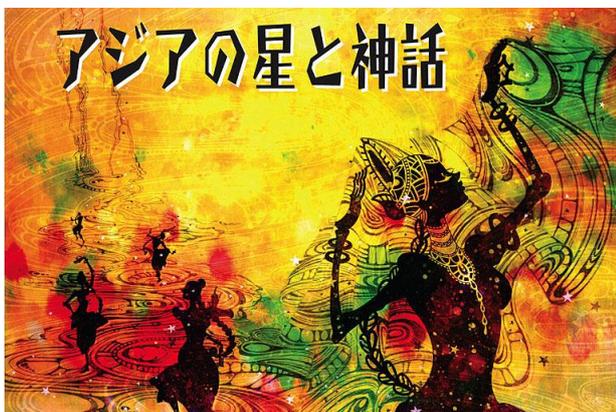


図:「アジアの星と神話」タイトル画(宮崎ひかり作)

#### 4. 「アジアの星と神話」の構成

##### (1) イントロ

現行の 88 星座は、今から約 5,000 年前にメソポタミアで原型が作られ、その後ヨーロッパで発達したものである。従って、星座に伴う伝説や神話もギリシア神話などである。しかし、アジア地域にも、独自の星座体系が作られていたり、神話・伝説が伝わっていたりする。では、アジア地域に住む人々は、どんなふうに星空を見上げ、どんな風に宇宙の事を考えたのかを、本番組でみていくことを説明する。

##### (2) 中国の星座

かつて日本で使われていた星座は、中国星座であった。中国星座は、約 2,500 年前に作られた、西洋の星座とは全く異なる体系で、星座の数は 283 にのぼる。

中国星座の特徴は、古代中国の地図を天に反映させて作られたという点である。北極星が「天の皇帝」、

付近には家族や宮殿、役人の星座。少し離れると役所や市場など、街の星座。遠く離れると、田や畑など田舎の星座が広がっている。

本番組では、中国星座でつないだ星空も投影し、その特徴を紹介すると同時に、現行の星座との違いも見る。

##### (3) 韓国の日食神話

日食の原理を説明したあと、韓国の日食神話を紹介する。日食の原理は、今では明らかになっているが、原理を知らなかった昔の人は、どんな風に考えていたのかという一例を見る。

##### ★韓国の日食神話概要★

天に、いつも夜のように暗い「黒い王国」がありました。王様は、真っ暗で何も見えないので、「これはこの国に太陽や月が無いからだ。北斗七星の中にいる犬に頼んで、太陽を盗んできてもらおう」と考えました。

王様に頼まれた犬は、はるばる出かけ、空に輝く太陽を見つけて噛み付きました。しかし、太陽はとても熱くて耐えられません。太陽を盗めなかった犬は、王様に報告すると、「それなら、月を盗んできておくれ」と言われ、再び出かけました。そして月を盗もうと噛み付いたら、今度は余りに冷たくて耐えられません。それでも、まじめな犬はあきらめずに、何度も何度も太陽に噛み付いては吐き出し、月に噛み付いては吐き出すことを繰り返します。

時々起る日食や月食は、天の犬が、太陽や月に噛み付いては吐き出しているからだといわれています。



図:韓国の日食伝説の一コマ(中村和斗作)

##### (4) ベトナムの七夕神話

日本でもおなじみの七夕伝説のルーツは中国にあり、今から2,000年以上前には原型が出来上がっていた。そして、伝説は中国から周辺の国や地域にも広がったのであるが、本番組ではベトナムに伝わる七夕伝説を紹介した。七夕伝説と天の羽衣伝説が融合したタイプ

で、同様の話は日本にも伝わっており、アジアの人々たちが交流していたことが伺える。

★ベトナムの七夕伝説★

天の世界に住む織姫と牽牛は恋人同士でしたが、恋に夢中な二人は仕事をしないため、天の神様は怒り、牽牛に地上に行って働くように命じ、二人は離ればなれになりました。

ある日、水牛が牽牛に話しかけました「天女が川で水浴びをするために天から降りてくる。水浴びをする間にピンクの羽衣を盗めば、織姫に再会できるだろう」。そこで牽牛が言われたとおりにすると、羽衣をなくして帰れなくなった天女は、別れた織姫だったのです。

再会した二人は結婚し、幸せに暮らしましたが、点の神様は、再び織姫を天に連れ戻してしまいました。

悲しんだ牽牛は、魔法の水牛の皮を身にまとい、織姫を探しに天に昇りましたが、それを見た神様は、二人の間に天の川をかけ、会えないようにしてしまいました。しかし、二人の愛情に感動した神様は、一年に一度、7月7日だけ、二人が会うことを許したのです。



図：ベトナムの七夕伝説の一コマ(宮崎ひかり作)

(5)沖縄・八重山諸島のむりかぶし(スバル)伝説

沖縄県八重山諸島に伝わる、スバルの伝説。伝説の中で、スバルが島全体を見渡せる所に行くのだが、それは天頂の事で、実際に八重山諸島からみた南中時のスバルはほぼ天頂に来る。番組では、伝説の紹介とともに、八重山から見た星空を再現し確認する。

★むりかぶし伝説の概要★

むかし、八重山に住む人々は大変苦しい生活をしていました。それを見た天の王様は、星々に「島を治めなさい」と命令しましたが、誰もできないと言うばかりです。その時、小さな「むりかぶし」が、王様の前に進みでて「その仕事を私にやらせてください」と言いました。天の王様はたいそう喜び、むりかぶしがいつも島全体から見えるよう命令しました。それ以降、むりかぶしは島の人々に季節を知らせ、農家の人々は毎晩むりか

ぶしの位置を見て、農作業の計画を立てるようになり、村は豊かになりました。



図：沖縄・むりかぶし伝説の一コマ(高山茜作)

(6)インドの日食伝説

インドに伝わる日食伝説を紹介する。韓国の日食伝説と併せて、共通点や相違点のサゼスチョンを行なう。

★インドの日食神話概要★

むかし、ラーフという頭が良く勇敢な怪物がいました。ある時、ラーフは、ビシュヌ神が地球の底に貯めていた不老不死の水を見つけ、密かに飲んでしまいます。それを見た太陽と月はビシュヌ神に報告し、話を聞いたビシュヌ神はたいそう怒り、ラーフの首を切り落とし、空に投げ上げてしまいました。それ以来、ラーフの頭と胴体は、180度離れて地球の周りをまわるようになりました。しかし、告げ口をした太陽と月を嫌ったラーフは、太陽と月がラーフの頭と胴体の場所を通る時、太陽と月に噛みついて日食と月食が起こるようになりました。



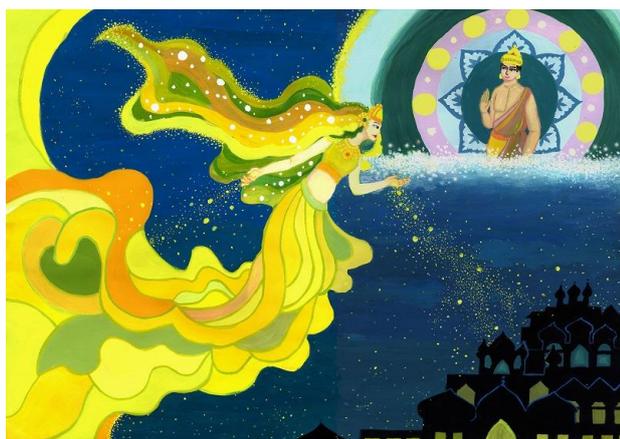
図：インドの日食伝説の一コマ(川崎宏恵作)

(7)インドの天の川伝説と、インドネシアの天の川伝説

これら二つの天の川伝説は、ともにインドにルーツを持つもので、インドネシア以外のヒンドゥー教圏に広く伝わっている。その中のバリエーションとして、二つの例を紹介した。

★インドの天の川伝説概要★

山の神ヒマワナには、ガンガーという名の、とても美しい娘がいました。ガンガーを見たインドラ神(神々の中で最もえらい神)は彼女を好きになり、結婚することになりました。インドラ神に嫁ぐガンガーは、空に四方に光を投げかけながら川のように流れながら天に昇っていき、その流れが天の川(アカシュガンガー)となりました。



図：インドの天の川伝説の一コマ(玉井満里子作)

★インドネシアの天の川伝説概要★

むかしむかし、アスティプラ王国の王家にビマという男の子は、海の底深くに沈んでいるという知識の万能薬を手に入れるために、冒険に出ました。その途中、海に住む巨大なドラゴンに教われ、海の中で何日にもわたる激しい戦いが続きましたが、ようやくビマはドラゴンを倒すことができました。ドラゴンは、のたうちまわり、波しぶきを高く上げて死んでしまいました。空に輝く天の川は、その時に立ったしぶきの姿だとされています。



図：インドネシアの天の川伝説の一コマ(山崎歩作)

(8)インドネシアの南十字伝説

赤道付近の国であるインドネシアは、南十字星がよく見える。本番組では、インドネシアのバリ島中部にある一つの村で伝えられている南十字伝説を紹介した。

★インドネシアの南十字伝説の概要★

むかしむかし、村に若くて美しい未亡人が住んでいました。ある時、村に住む大工の若い男が、小屋を建てる仕事をしていました。すると彼女が時々、作業をする近くを通りかかり、時には気を引くような行動をとりまです。そのために大工は仕事に集中できず、最終的に、全体が斜めに傾いた家を作ってしまった。

少しだけ傾いた十字架の形をして、夜空に輝いている南十字星は、大工が作った斜めの小屋の姿が天に昇ったのだといわれています。



図：インドネシアの南十字伝説の一コマ(岩橋藍作)

5. さいごに

「アジアの星と神話」では、アジアに広がる星の文化について紹介した。アジアは自分たちの住む身近な地域であるため、それぞれの文化に面と向かって接することがない場合もある。今回の番組では、それらを取り上げることにより、改めて自分たちの文化や自然観などに思いをめぐらせる機会としてもらうことを狙った。

今後、天文教育の場で、アジアの星の伝説が多くとりあげられることを期待するものである。

また、今回は宝塚大学とのコラボレーションによりプログラムを制作するという、新たな試みを行なったが、イラスト制作を担った学生の方々による熱心な取り組みにより、来館者も楽しめる内容を作り上げることができた。

最後に、イラスト制作に協力いただいた宝塚大学、大河繁教授、イラスト制作者の皆様にご挨拶いたします。